

昭和六十年 度

大谷学会研究発表要旨

## 『俱舎論』における本無今有論の背景

——『勝義空性経』の解釈をめぐる——

宮下 晴輝

有部の諸論書の中で『俱舎論』の占める位置は、いわゆる六足・発智から『婆沙論』へと種々に展開した教義を、『心論』等による再組織を引き継いで、さらに最高度に展開論述したものである。従って、ときに伝統説をしりぞけ異説を立てているにも関わらず、「全体としては形式・内容とも先行の説一切有部の論書を継承、発展させたもの」であることは明らかであり、有部の教義学の「一つの完成態」ともいえる指摘されている。このことはまた、ここに『俱舎論』述作の基本路線があったことをも意味するのであろう。

さて、『俱舎論』という論書の性格をこのように確認するにしても、ときに伝統説をしりぞけそれとの間に一定の距離を置くにさいし、しばしば異常ともいえるほど大きな落差を示すことがある。例えば、有為相についての長い熾烈な議論の最後にヴァーイパーシカ (Vaibhāsika) の宗義を再説し、つぎのように付け加えている。

難責する者たちがいるからといって伝統説が棄てられたりはしないだろう。というのは、鹿がいるからといって麦が蒔かれぬわけではない、蠅が集っているからといって菓子子が

食べられないわけではないのだから。従って、論難に対しては反論しなければならぬし、宗義は遵守されなければならないのである。

ヴァーイパーシカに対するこのような嘲笑は、先に確認した『俱舎論』の基本路線から大きく外れ、むしろその路線を放棄しているとも見て取ることができる。

従来このような世親の態度は、「経量部」の立場に立ってなされたものであると解されてきた。この「経量部」なるものが説一切有部に対するなんらかの批判勢力を意味し、しかも『俱舎論』はその「経量部」による説一切有部批判の書であると考えられるのであれば、嘲笑によってどんな落差が示されようと、それは二つの部派間の抗争の激しさを反映するものにならざるを得ない。とすれば先の本路線などというの見せかけだけの疑わしいものとなってしまうだろう。しかしながら、これまで『俱舎論』が高く評価されてきたのは、その「経量部」としての批判にあるというよりも、むしろ先の基本路線の堅持にあったように思われる。有部の論書としてその基本路線を徹底していながらも、それにも関わらず、その路線を根こそぎにしてしまうような眼を内に抱えているのが『俱舎論』という論書なのである。さらにまた『俱舎論』における対立の構図は、Abhidharmika (対法師) と Sautāntika (経部師) との対立という形を取っている。この構図自身は、同じニカーヤに属する者たちの対立を意味しているのはいうまでもない。確かに Abhidharmika を代表するものはヴァーイパーシカであるけれど、他方 Sautāntika を代表するものが有部と同じレベルでの他の部派、つまり別のニカーヤに属する者たち (Nikāyānta-

nya)を意味するのではない。とすれば、有部のなかにその教義の正当な路線とはかなり異質な傾向を持つグループが実際にいたのだと考えなければならぬことになるだろうか。しかし、有部の中にそのような特定のグループを見いだそうとする試みからは、先の「嘲笑」が示す落差の大きさを測ることはできないだろう。従って、構図中に布置された一方の対立項をヴァーイバシーカに当てることに問題はないとしても、それとまったく同じ意味のレベルでその反対項を特定し得るものであるかどうかは極めて疑問である。

ここで我々がさしあたって取り組まねばならない問題は、「經量部」がどういう人々を指して用いられたのかということよりも、「Abhidharmika」と「Sautrantikaの対立」という構図のもとにどのような対立点を描き出されているのか、しかもそれが最も際だって現れるのはどんな問題においてか、ということにある。この両者の論点を註釈者たちはつぎのように要約する。

生起 (utpāda)とは、Sautrantikaの教義によれば、もと存在せずいま存在するところが特質 (abhūtvābhavalaksana) を持つところ。Vaibhāsikaの場合、その生起とは作用 (kāritra) である。

ここに「生起」(utpāda)とは、縁起 (Pratītyasamutpāda)の解釈に際して論じられているものであるが、このことはそれだけにとどまる性質のものではなく、三世実有説、二諦説等々の問題にまで波及することは言うに及ばないであろう。「法の生起」を、ヴァーイバシーカは作用論によって解釈し、他方サーウトランティカは、いわゆる本無今有論によって解釈する。

もしも『俱舍論』におけるこの本無今有論の淵源が多少とも見

いだされるならば、「サーウトランティカ」の名のもとに意味されていることや、並びにその対立の構図の意味が幾分か明確になるであろう。結論から言えば、筆者は、その淵源が『瑜伽論』にあるのではないかと考えている。この「本無今有」と言う語の直接の典拠は『勝義空性経』にあるが、いわばこの経言がどのように解釈され、そのことによって如何なる縁起論を持つに至ったかということが、この場合の判断の材料である。

しばしば引用される『勝義空性経』の内容は次のようである。眼が生ずる時、どこから到来するのでなく、滅する時どこに集合するでもない。このように、比丘たちよ、眼はもと存在せずいま存在し (abhūtvā bhavati)、存在しおわって消え去る (bhūtvā pragaçhati)。業 (karma) は存在し (vipāka) は存在するが、法に対する言表機制 (dharma-niketa) の他に、こちらの蘊を捨て他の蘊に続生する作者は認知されない。

その場合この法に対する言表機制とは、即ちこのことである。これ有るときこれ有り、これ生ずる故にこれ生ずる。即ち、無明に縁って行有り、行に縁って識有り、……。

『婆沙論』中に三世実有説を論ずるに当たって、たびたび「本無今有」に対する通釈が行われる。「説一切有」の成立は「本無今有」の否認を意味する。しかし「生起」はなんらかの仕方で本無今有であるが故に、法の本体が恒常に有ることと法の況位が現在に生起して有ることを区別する。法の本体は恒常であるが、その況位は時に有り時に無いものとして本無今有であることを容認する。そして況位の有無を「作用」の有無によって定立する。

これに対して『瑜伽論』の用意する本無今有論は、第一に、法

の本体とその存在況位との関係を衝くことにあり、第二に、存在況位の有無を定立する作用論を破砕することにある。有部が法の本体としての「自相の有」とその存在況位としての「相の有」との両者の「有」の意味領域を区別しているにも関わらず、その両者の「有」を共に「相として」と見なし、そこから難点を導く。また他方、有部自身にとっても「内部で作用する主体」としての「実的作用」は認めていないにも関わらず、有部のいう作用を「実的作用」と同一視して、諸法には作用がないと批判する。

「諸法が諸法を生ずる」と經典中に説かれているが、しかし事態は「ただ法のみ」「ただ行のみ」「ただ因果のみ」であって、そこに作用は存在しない。ただ、その諸法に対する言表機制としてかかる表現定立がなされているに過ぎない、とする。

以上の二点に要約することのできる『瑜伽論』の縁起論は、声聞地において「縁性縁起」(idampratyayatāpratyasamutpāda)と呼ばれる縁起論に相当する。また『瑜伽論』撰事分において見られる『勝義空性経』の解釈もこれに合致する。従ってこれは『瑜伽論』全体に通ずる縁起論と考えられるが、いわゆる「種子説」「アーヤ識説」によって代表される縁起論と一応区別できる。しかし、ここにみた縁性縁起としての縁起論から「本無今有」という言葉を外してしまえば、その骨子は決して「瑜伽論」独自のものとはいえずむしろ通仏教的といえる。ただ、有部によって展開された三世実有説に対する批判点確立のために、この「本無今有」が強調されたものと思われる。

この様な意味をもった本無今有論が『俱舍論』中にも見出されるかどうかが今回の発表の要点である。『瑜伽論』の本無今有論として上に要約した第一点は、『俱舍論』の三世実有説批判の中に

看取できる。『俱舍論』がいわゆる「本無今有」なる言葉で有部ブアイバーシカを批判していることはよく知られている。問題は第二点にある。特に『瑜伽論』において展開された作用論批判はその本無今有論の最も特徴のあるものといえる。

『俱舍論』第一章界品において、眼が色を見るのか、それとも識が色を見るのかという論争が取上げられている。いわゆる根見家識見家の論争であるが、その最後に両者の説を嘲笑してサーウトランティカの見解が述べられている。

これに対してSautāntikaたちは言う。一体どうしてこんな虚空を食べるのか。というのは、眼と諸色に縁って眼識が生ずるのである。その場合、誰が見て、あるいは、誰が見られるという事か。実に、この「眼と色に縁って眼識が生ずる」という事象は、作用が無く、ただ法のみであり、ただ因果のみである。それに対する表現機制(vyavahāra)のために、随意に、諸の喩表(upacāra)がなされるのである。即ち「眼が見る。識が識る」というように。この「表現機制としての喩表」に固執してはならない。というのは世尊によって「土地の用語に固執してはならない。世間の人についての命名を越え求めてはならない」と説かれているからである。

しかしながら、KāśhiraのVaiśhāṅikaたちの宗義はこうである。即ち「眼が見る。耳が聞く。鼻が嗅ぐ。舌が味わう。身が触れる。意が識る」と。

ここにサーウトランティカの見解とさていれるものは『瑜伽論』の本無今有論にはかならない。従って、『俱舍論』の本無今有論は『瑜伽論』に淵源をもつということができであろう。